
コメント

白川博之 理由表現「だけに」をめぐって

個人的な話で恐縮だが、評者（M）が大学院生の時、ある研究会で「だけに」について研究発表を行った際、そこにいた留学生の院生（むろん超級）から「私は「だけに」を使ったことがないし、日本人が使ったのを聞いた記憶もない。学習者には不要な形式をなぜ研究するのか」という質問を受けた。20年以上も前のことである。文法に限らず「なぜそれを研究するのか」は、私たちが常に考えなければならない問いであるが、評者にとっては個人的な先の質問の解答と、何よりそこに至る際に考慮すべき観点（特に③学習者は、なぜ「だけに」を使えないか）を本論文から気づかされた。（M）

村上佳恵 主節述部における直接受身の適切な使用場面

一般に、直接受身は迷惑性に関して中立で、出来事の内容によって迷惑の意味がある場合（叱られた）とない場合（褒められた）があるとされるが、「先生のお宅に{連れて行かれた/招待された}」のように、ほぼ同じ内容であっても、迷惑性を感じさせ直接受身が不適切になる場合（前者）と、そうでない場合（後者）がある。この論文は、直接受身の適切な使用条件を探り、その1つとして言語活動を含意する動詞（招待する）の直接受身には迷惑性が発生しないこと、などをはじめとした、具体的な興味深い指摘を行っている。（M）

宮部真由美 中級・上級レベルの日本語にみられるシテシマウ ——意見と説明を述べるテキストの用例を中心に

中・上級レベルになると、文法的には一応問題はないものの、母語話者の使い方とは異なるというケースが問題となってくる。この論文では、「シテシマウ」の使い方における母語話者と学習者の違いを作文コーパスを使って検討している。その結果、学習者の「シテシマウ」の非用の原因として、テキストタイプの違いの理解の欠如などが考えられることが明らかになった。（1）

劉 川 箇所を表す名詞「あたり」の接続辞化について

箇所を表す名詞「あたり」には、「相手のベースにはめられたあたり、谷川さんらしくないなあ。」のように、助詞を伴わずに文中で使用され、主節の根拠を表す接続辞のようにふるまう場合があることを指摘した点が、この論文の第一の功績である。こうした接続辞用法が、名詞の「あたり」からどのように生じると考えられるか、本論文は、そのプロセスを「あたり」の用法全体から考察した。(M)

ゲエンティ タイントゥイ

ベトナム人日本語学習者による
日本語オノマトペの使用実態と産出傾向

本論文は、日本語の特徴の1つであり、かつ学習者にとって難しいと言われるオノマトペを、学習者がどのように使用しているかについて、独自に制作したアニメーション映像を用いて調査した。その結果、オノマトペがわからない場合、知っている語を反復させて造語（「くるくる」に対し「まるまる」を用いる）したり、物事の状態を学習者の音感および母語の表現を利用して擬音的に捉える（風車が {ひゅうひゅう／びゅうびゅう} 回る）などの工夫をしているという興味深い事実が明らかになった。(M)

本多由美子 二字漢語における語の透明性の相違 ——日本語母語話者と非漢字系日本語学習者の比較

漢字教育の方法に改善の余地があることが主張され始めている。その理由の1つに、二字（以上の）漢語の意味が単漢字の意味の合成では得られないケースが多いことが挙げられる。この論文は、二字漢語の透明性に関する判断が母語話者と学習者で異なるかを調査したもので、今後の漢字教育改革の基盤となり得るものである。(I)

伊藤秀明 使い方の観点からみた対のある自他動詞 ——現代日本語書き言葉均衡コーパスを利用して

自他の対応がある場合の自動詞と他動詞の使い分けについては、これまで数多くの研究がある。この論文では、「私的表現／公的表現」「状況把握／状況報告」という観点から、BCCWJにおける用例を分類し、新たな分類の観点を提示している。(I)

陳 秀茵 書き言葉におけるコトニナルの使用実態調査と分析
——日本語教育への示唆

この論文は、書き言葉における「ことになる」の使用実態について、ジャンルごとの出現率・8分類した用法の出現数・前接語・後接表現などを調査した。「来週の会合は山田が出席することになった」のような「予定の決定」の使用率は高いものの、日本語教育で典型的な用法として導入される「意志的な予定の決定」(来年、結婚することになりました)の用法はそれほど多く使われていないことなど、示唆に富む指摘がなされている。(M)

金谷由美子 漢語サ変動詞のボイスに関する一考察
——自他交替型と無交替型に分ける試み

日本語の漢語サ変動詞のかかなりの部分は、形式や意味の点で中国語、韓国語と共通するが、自他については一致しないことがまま見られる。この論文では、「する」「させる」との関係からのサ変動詞の再分類が提案されている。漢語サ変動詞は、これら三言語の相互習得にとっても重要な意味を持つものであり、今後、対照研究によってこの論文の内容が精査され、広く利用されることが期待される。(I)

小森万里 日本語母語話者と日本語学習者の意見文における
ダロウの使用状況

母語話者の作文と学習者の作文を比較すると、いくつかの差異が見られる。この論文では、意見文を対象に、「だろウ」の使い方の違いという点からこの問題を考えている。調査の結果、学習者は「だろウ」よりも「と思う」を多用する傾向にあり、特に結論部の構成にこの違いが反映していることが明らかになった。(I)

花井 愛 日本語学習者は「条件」をどのように表現するのか
——中国語話者の事実と仮定の表現差に着目して

この論文は、初級・中級・上級・超級の中国語母語日本語学習者各10名の条件表現の使用を、日本語母語話者10名のデータと比較し、条件表現をどのように習得しているかを調査した。その際、「と・ば・たら・なら」といった形式から見る(form-to-function analysis)のではなく、「条件」をどのように表しているか(function-to-form analysis)という方向から調査した点が、本研究の大きな特徴である。その結果、中間言語として「もし」の使用が見られるなど、興味深い習得過程が指摘されている。(M)

小口悠紀子 「話す」と「書く」という課題の違いが
中級学習者の語りに及ぼす影響
——個人内における接続表現の変異に着目して

語りというタスクにおいて、準備時間（計画性）やメディアの違い（話す／書く）が産出されるテキストに影響を与えることは広く知られている。この論文では、新たな出来事の生起を表す接続表現の使い方について、話す課題と書く課題の違いが考察されている。その結果、中級学習者は「ト・タラ」系の使用が少なく、母語話者との間に差が見られる一方、書く課題の方が「ト・タラ」系の使用が増えるという一般則にのっとった結果が得られた。(I)

陳 嬌如 日中両言語における名詞の照応と指示詞の省略に関する研究
——名詞の個性性と文脈の連続性に着目して

英語（などの定冠詞を持つ言語）では、テキスト内に導入された普通名詞を、定冠詞・指示詞などの限定詞をとまわずに繰り返すことは統語的に許されない。一方、日本語では、普通名詞を繰り返し用いることで同一物指示が保証されることが多い。中国語は定冠詞を持たない点では日本語に近く、一定の条件下では指示詞の省略が可能だが、その条件は日本語と異なる。この論文では、この観点から、日中両言語における同一物指示に関する興味深い考察が行われている。(I)

苺宿紀子 応答表現としての「本当」に関する一考察
——「あ、ほんと」「ほんと」「ほんとだ」

この論文は、応答表現としての「本当」の使用実態と機能を調査し、機能により形態が異なることを指摘した。「本当」の機能を三分類し、未知の事実を聞いたことを示す際には「ほんと」「あ、ほんと」等が、相手の考えを聞いて同意することを示す際には「ほんと、ほんと、ほんと」「ほーんと」が、また会話の場で相手とともに気づいたことを示す際には「ほんとだ」が使われることを指摘している。学習者にとっても有益な事実が記されている。(M)

呉 映璇 合意形成談話における同意表現
——台日接触場面を中心に

本論文は合意形成場面における同意表現を調査し、その結果、日本語学習者は同意を表す際に、相づち（「そう」「そうそう」）を多く使うこと、同意表現の使用に偏りがあり、日本人が多用する「確かに」は出現しないこと、日本語母語話者の発話をそのまま反復する、すなわち日本人の発話に依存して同意を表明することなどが明らかになった。言語表現の研究としても言語行動の研究としても興味深い結果が示されている。

(M)

林 琳 看護記録語彙の使用実態と特徴分析
——看護師国家試験語彙・日本語能力試験語彙との
比較を中心に

看護に関する日本語教育を考える上で、看護記録の分析は重要である。この論文では、看護記録のデータベースを分析したもののうち、名詞部分を取り上げ、看護関連語彙の分析に関わる基礎データを提示することに一定程度成功している。

(I)

山元一晃・稲田朋晃・品川なぎさ
医師国家試験の名詞語彙の対数尤度比に基づく分析と
教材開発の可能性

介護・看護分野の日本語教育に比べて、医師を目指す留学生に対する日本語教育は手つかずの状況にある。この論文では、医師国家試験の過去に出題された問題をデータベースとし、名詞に関する部分をBCCWJを参照コーパスとしたものと比較し、対数尤度比を用いてその特徴語を抽出している。今後の同分野の研究の出発点となる論考であると言える。

(I)